
只今、地下牢設営中。

Vanargand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

只今、地下牢設営中。

【Nコード】

N0943N

【作者名】

V a n a r g a n d

【あらすじ】

とある夏の日。俺の傍若無人な姉は即決した・・・何を？つて？それは最近発売されたPC用ゲームソフト《地下牢設営》つてのを買う事・・・

それは凄く横暴な世界観とシステムを持つ《ゲーム》だった・・・

序章「姉」

俺の名前は、カリノ狩乃 フウライ風籟

風籟は風の音という意味らしい。なんかよく分かんないが。

そんな訳で今俺は学校から家まで帰宅中だ。いや、《俺達は》だな。

今俺の隣りには姉ミスキが歩いている

誰が見ても完璧な美少女。

だが、何も知らない周りの人はまだいい。

姉ミスキは激しすぎるのだ。

今俺が通っている高校には《伝説》がある。

それは、隣りの高校．．いや、《だった》所の不良バカにからまれたから、その場に居た不良を全員ぶちのめし、さらには、その高校が気に入らないという理不尽極まりない理由により、その美貌をつかい周りの男を誑かし、その高校を廃校にまでしたという《伝説》がある。

．．正直そんなこととしておいてよく処分とかくらわなかったよな
ーと思う

そんな姉ミスキの弟が俺だ。

それから一年たったが、いまだに姉に恨みを持つ不良が多いのか
喧嘩をいまだに振ってくる奴がいる。

「ゴラァ！そのアマアァー！チョットコツチコイやー！」

ほら居た。しかも、典型的な不良。
テンプレート

俺はこういうのは慣れているので、スルーする。

不良はズカズカと姉に近づく。
バカ ミズキ

姉は心底びつくりした様子で「ひいっ！！」と声を出す。
ミズキ

・・・何がひいっ！！だ

「狩乃さん！あぶなあい！」という間拔けな声とともに周りに隠
れていた《美月後援会》の皆さんが一瞬で不良の周りに集合する。
ミズキ ファンクラブ

「なっなんだあコイツ！ゴッゴルアァー？」
カリノ

「狩乃さんに手え出そうとしやがって！」

「羨まし過ぎるぞー！！！」

「えっええええええー！」

すると愉快的な打撃音が鳴り響いた。

一分すると姉の周りには俺しか居なくなつた。
ミズキ

・・・ひよつとすると前に姉ミスキに襲ってきた奴が居たかもーなんて思っている・・・

美月ミスキ「てへっ！助けられちゃった！」

「何がてへっ！だ？何が助けられただ！」

美月ミスキ「えゝん怒られちゃったよー」

「ロシアの軍隊格闘術習ってたのに？それで姉さんは何になりたかったんだよ・・・」

美月ミスキ「・・・てへっ？」

「・・・姉さん・・・」

美月ミスキ「そんな哀れむような目で見ないでー」

「・・・不毛だ。」

そんなこんなで家まで歩いていると、ふと姉ミスキが足を止めた。
何だ？と見ていると、姉の視線の先にはとあるゲームショップが・

・
姉ミスキは躊躇無くそこに入った・・・

そうだった・・・姉ミスキさんは無類のゲーム好き。特にゲテモノが好きだ・・・

そんな事を思っているうちに姉が戻ってきた。
しかも、何か買っていた。
それになんだか嬉しそうだ。

美月^{ミスキ}「じゃ、帰ろ？」

・・・そうだな

何買ったんだろ？

そんな事を考えてる間に家についた。

一章「インストール」

家の玄関の鍵を開けて扉を開けると、

どおん！どどどおおお……とととどどどお！！！！

「もう来たか……」

告白して付き合っていた男子に何か全体的に良い雰囲気になったところで「好きな子が出来たから、別れてくれ」と話を切り出され、それでブラコンに奔った妹……いや、義妹^{アヤ}が「お兄ちゃんおかえり」と言って義妹^{アヤ}ミサイルをかまそうとする。

背後は硬い石畳の階段なので万全な受身の体勢に移行しようとする

どすっ！……いつってえ

見事にくの字に曲がった俺はそれなりの段差がある玄関の階段の一段下に突き落とされる。義妹^{アヤ}ミサイルはそんな威力があるのだ。

「彩^{アヤ}、それはもうやめてくれ・・・!？」

最後の絶句は彩^{アヤ}が自分のそれなりにある胸を押し付けてきたからだ。

「!？・・・!!？」

不測の事態におどおどしながらヘルプミーと目を姉にやると、

姉よ・・・ケータイモツテナニヤッテンスカ？

パシャシャシャシャシャシャシャシャ・・・

九連写しやがった・・・

しかも笑ってやがる!!

はぁ・・・不幸だ・・・

その後俺は、まだ胸を押し付けてくる彩^{アヤ}を退かし、自分の部屋に戻った。

「・・・なにしてんの？」

「ちよつと、借りるわよー」

部屋には姉が居た。しかも、俺のパソコンつけてるし！
オトコノロマン

絶対秘蔵フォルダが見つければいろいろヤバイ。隠してないし。
厄介だ。うん。とても。あつてもパスワードかけてるからダイジヨ
ーブかなーと見ていると、

《テロリロリン》

・・・は？パスワード。バレテル？

「ちよつと待ったー！」

俺は急いで《フォルダ オプション》から《隠しファイルおよび隠しフォルダを表示しない》にチェックが入っていることを確認するとデスクトップの絶対秘蔵^{オトコノロマン}フォルダのプロパティを開くと隠しファイルにチェックをつけた。プロパティをOKを押して閉じると絶対秘蔵^オフォルダが半透明になり画面から消えた。

「ちょっと、パソコン借りたいんですけどー」
「おわっ！ごめん。」

危なかったーと安堵してると、

《ウィーン．．ガシャ》と姉が光学ドライブのふたを開けて、絵柄が見たことのないディスクを入れた。

興味本位で「何それ？」と聞いてみると、

「さっき買ってきたやつー」

と、答えてくれた。

「またゲーム？」

「うん」

「どんなやつ？」

「説明書がそこにあるから見てー」

説明書が床に転がっていたので見てみると、

《勇者どもよ、そろそろ正義の味方を演じるのも飽きただろ？我が素晴らしき帝国に寝返り、悪の世界を心ゆくまで楽しんではどうだね？

なに？「それは出来ない」だって？そんなに世間の目が気になるのか・・・ならば仕方あるまい。我が愛する手下どもに、愚者退治を命じるとしよう・・・

・・・正義の仮面をかぶった？偽善者ども？に、悪の力を思い知らせてくれる！！！！》

・・・なんだか圧倒されてしまった。

「・・・なんか凄いね。これ。」

「でしょっ！？」

「なにそれ？ゲーム？みせて？」

今話しかけてきたのは、氷。義弟だ。ちなみに俺と氷とは相部屋だ。

「ほら」と言って説明書を氷ヒョウに渡す。

見事キャッチした氷ヒョウはページをめくる。

「これはまた・・・マイナーな・・・」

《グロオオオロ!》

「あっ起動した。」

・・・何だか気色悪い生物?が見える。

「ねえインストールしていい?」

「Dドライブにインストールしてね」

「分かった」

姉が俺のパソコンにインストールし始めた。

一章「インストール」(後書き)

昨日は2話連続投稿は用事があつたんで出来なかったなので今日にしました。

なんか、いろいろすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0943n/>

只今、地下牢設営中。

2010年10月10日20時50分発行